

沖 慶子（京都大学・院）

1. 研究の背景と目的

近代日本の大学における地理学研究は、その基盤を歴史学と地質学に大きく二分できる。そのため、近代日本、とりわけ地理学講座開設以前の地理学史を検討する際には、両者の考慮が必要となる。これまで、地理学関連雑誌については、主に地質学関係者からなる『地学雑誌』が注目されてきたが、それとともに、歴史学を基盤として発達してきた地理学を検討する重要性は明白である。しかしながら、同時代に発行されていた『歴史地理』（表1）の重要性に関する議論は積極的になされていない。

表1 年表：地理学関連雑誌の創刊と関連事項（帝国大学令公布は1886年、帝国大学の増設は1897年である）

年	地理学関連の主な雑誌の創刊（創刊時の発行機関）	地理学関連事項
1879	『東京地学協会報告』（東京地学協会）	小藤文次郎，東京大学理学部地質学及採鉱学科 卒業
1889	『地学雑誌』（地学会；敬業者発売発行）	
1893	『地学雑誌』（合同後の東京地学協会），『地質学雑誌』（東京地質学会）	
1895		山崎直方，帝国大学理科大学地質学科 卒業
1896		小川琢治，帝国大学理科大学地質学科 卒業
1899	『歴史地理』（日本歴史地理研究会）	
1900	『地理と歴史』（地理歴史学会）	
1901		石橋五郎，東京帝国大学文科大学史学科 卒業
1907		史学地理学第二講座開設（京都帝国大学文科大学）
1911		地理学講座開設（東京帝国大学理科大学）
1919		東京帝国大学の同教室が地理学科として独立
1924	『地球』（地球学団），『地理教育』（地理教育研究会），『地理学研究』（守屋荒美雄監修・地理学研究会）	
1925	『地理学評論』（日本地理学会）	（以降，省略）

中川（1978）は同誌を歴史学の雑誌とみなしたが、その後、吉田（1982）は大学における人文地理学研究の開始が歴史地理であった点を指摘して、『歴史地理』関係者の多い史学科国史科に注目した。近年になって、小田内通敏らが主宰した『地理と歴史』とともにとりあげられるなかで、再び、『歴史地理』は歴史学を中心とする雑誌としてあつかわれるなど（岡田，2000），同誌の地理学史上の位置づけに関する議論は現在に至るまで収束していない。

そこで本研究では、『歴史地理』の地理学史における意義を検討する観点から、同誌における論考とその執筆者について詳細な調査・分析をおこなう。なお、一般に、日本初の地理学講座が開設された1907年に「アカデミー地理学」が成立したとみなされている。本研究においては地理学講座開設以前という意で「アカデミー地理学前史」という語を用いる。

2. 研究対象の概観と研究手法

『歴史地理』を発行していた日本歴史地理研究会（のちに、日本歴史地理学会と改称）は、歴史学研究において地理的知識の重要性が認識され、歴史地理研究の需要の高まりを受けて設立された研究会である。その構成員は、主に東京帝国大学文科大学国史科の関係者からなっていた。

表 2 調査対象の巻および号(巻-号で示す)

年\月	Jan.	Feb.	Mar.	Apr.	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	
1899	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1-1	-2	-3	本研究では、創刊から 1907 年までの同誌における論考を精査する(表 2)。その際、それらの執筆者および歴史地理あるいは歴史地理学観を整理することに留意する。
1900	1-4	-5	-6	2-1	-2	-3	-4	-5	-6	-7	-8	-9	
1901	3-1	-2	-3	-4	-5	-6	-7	-8	-9	-10	-11	-12	
1902	4-1	-2	-3	-4	-5	-6	-7	-8	-9	-10	-11	-12	
1903	5-1	-2	-3	-4	-5	-6	-7	-8	-9	-10	-11	-12	
1904	6-1	-2	-3	-4	-5	-6	-7	-8	-9	-10	-11	-12	
1905	7-1	-2	-3	-4	-5	-6	-7	-8	-9	-10	-11	-12	
1906	8-1	-2	-3	-4	-5	-6	-7	-8	-9	-10	-11	-12	
1907	9-1	-2	-3	-4	-5	-6	10-1	-2	-3	-4	-5	-6	

3. 結果および考察

創刊から 10 巻までの『歴史地理』掲載論文を詳細に検討した結果、同誌における歴史地理／歴史地理学に対する見解は複数あることが明らかになった。なかでも、筆名「こ、し」による「日本歴史地理の研究に就いて」(1 巻 1 号)では日本歴史地理研究は「一の科学を形成すべきものにあらず」、国史研究の「補助学科たるのみ(マ)」と宣言されている。しかし、同論考中には、日本歴史地理研究の主眼の一つとして人文地理学に相当する内容が挙げられており、この執筆者自身が歴史地理に対する見解を整理できていなかったようである。日本歴史地理学会編(1933)によっても人物の特定はできないが、もし、この筆名「こ、し」が一人物であって実名の一文字目を示すならば、『歴史地理』執筆陣のなかで最も可能性が高い人物として小林庄次郎を挙げることができる。

また、筆名「麻郷」による見解も重要である。この筆名を用いた論考は数多く掲載されているうえに、筆名「こ、し」と相対する見解を同巻で示しているからである(但し、5 号)。筆名「麻郷」は、歴史地理は「historical geography の訳語」であって、表記は「史的地理」が適切であると明確に述べている。なお、これと一致する見解が 5 巻 12 号における筆名「紫」による論考でみられる。筆名「紫」は「吾人は本誌創刊の当時(中略)大方の注意を請ひおきたり」と述べているので、両者は同一人物である可能性が高い。同氏の見解が期待するほどに普及しなかったことを嘆き、今後の抱負を強調していることも、同一人物であることの裏付けといえる。この人物の実名については現在のところ手がかりを得られていないが、坪井九馬三の重要性が注目される。坪井は、講演「歴史地理とは何ぞや」(2 巻 9 号に掲載)の冒頭で「歴史地理は地理学の一部なり」と宣言している。

このように、『歴史地理』は様々な歴史地理／歴史地理学観を抱く研究者らによって発行されていたのであり、近代日本における地理学の系譜の一つとしてとりあつかわれることが適切であろう。

引用文献

岡田俊裕(2000)『日本地理学史論——個人史的研究』古今書院。288p.

中川浩一(1978)『近代地理教育の源流』古今書院。360p.

日本歴史地理学会編(1933)『歴史地理 自第一巻至第六十六巻 索引』地人書館。325p

吉田敏弘(1982)史学地理学講座における近代人文地理学導入の系譜。京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房。pp.192-205.